

現代の諸問題

佐々木恒平

目次

第I部 現代の諸問題

地球温暖化について

原子力の安全な利用について

世界の分割

キリスト教の問題

戦争について

第II部 過去の再認識

南京虐殺

真珠湾奇襲

原爆投下

天皇の役割

民主主義

27 26 25 23 21 20 17 15 12 7 2 1

目的の追究

28

ルーズベルトの罪状

33

西洋文明について

36

第III部 未来について

39

中道

40

コーランについて

46

第I部

現代の諸問題

地球温暖化について

1

昨今の日本では、異常気象が続いています。毎年のように水害が起き、夏の暑さは年々過酷さを増しています。

原因は地球温暖化です。温暖化対策が人類にとっての課題であることは、誰の目にも明らかです。

にもかかわらず、温暖化の原因はまだ分かっていない、と主張する人々がいます。甚だしきに至っては、地球は温暖化していない、という声さえ聞こえてきます。彼らの言葉に耳を傾ける必要はあるでしょうか。

2

はじめに、温暖化そのものの真偽について考えてみましょう。

そもそも、地球の気温が上昇していないとすれば、北極の水はどうして溶けているのでしょうか。さらに、世界各地で氷河が溶けていることが確認されています。一体どんな理由で、氷が溶けているのでしょうか。

氷が溶ける場合、原因はいくつか考えられます。

一つ目は温度の上昇です。

二つ目は圧力の上昇です。

このいずれかが起きたときに、氷は解けます。

さらに三つ目として、化学的な変化によって氷が分解されている、という可能性もあります。しかし、水を化学的に分解するためには、強力な還元剤が必要です。世界中の水が溶けているのだとすると、誰が氷に還元剤を掛けているのでしょうか。

また、地球表面の大気圧が上昇しているという証拠もありません。したがって、氷が溶ける理由は、温度の上昇しか考えられません。実際、平均気温の上昇を示すデータは多数あります。

2・1

あるいは、氷河の消滅については、次のような説明もありうるでしょう。

氷河が一定の大きさを保つことができるのは、毎年、氷が溶け出すのと同じ分量の、雪が降っているからです。溶けた分と増えた分の差し引きがゼロになるので、氷河は一定の大きさを保ちます。したがって、氷河が小さくなっているのは、雪の量が減っているからだ、と考えられます。では、どうして雪の量が減ったのでしょうか。

たとえば、地球全体の降水量が減っているとしてみましょう。つまり、雨の量も雪の量も共に減っている、と考えてみましょう。そうすると、地球全体で海水の蒸発量が減っている、ということになります。なぜならば、地球上で降る雨と雪の全量は、海水の蒸発量と等しくなければならからです。そうでなければ、宇宙から水が降っている、ということになるでしょう。地球上に存在する水の量がかわらないならば、降水量と蒸発量は一致するはずですが。

しかし、海水の蒸発量が減っているということは、地球が寒冷化していることを意味しています。なぜならば、水温が下がるほど、水の蒸発量は減るからです。しかしながら、本当に寒冷化が起きているのだとすると、雨の量と雪の量の比率も変わるはずです。つまり、雨の量が減り、雪の量が増えるはずです。したがって、氷河は成長することになるでしょう。これでは全く説明になりません。

また、たとえば、雨の量が増え、雪の量が減ったために、氷河が減少しているとしてみましょう。しかし、それはやはり温暖化を意味しています。結局、氷河の融解に関して、地球温暖化以外に満足のゆく説明はありません。

3

さて、次の問題は、温暖化の原因です。

ここで、原因を探索する前に、次のような疑問について考えてみましょう。そもそも、温暖化に原因があるというのは本当でしょうか。温暖化は自然に起きているもので、原因はないのではないのでしょうか。

しかし、もしも温暖化が、原因もなく、自然に起きているのならば、いまごろ地球の気温は四千六百万度になっているはずですが、なぜならば、地球が誕生してから現在まで、四十六億年が経っています。もしも、百年間に一度気温が上昇する、ということが自然に起きるのだとしたら、四十六億割る百で、現在までに四千六百万度の気温の上昇があったはずですが。

しかし、これは事実と異なります。よって、地球の温暖化には、何らかの原因がなければなりません。では、一体何が原因なのでしょう

うか。

3・1

まず考えなければならないのは、地球外の要素です。一つには、軌道の作用があります。

太陽の周りをまわる地球の軌道は、わずかずつですが、毎年ずれてゆきます。地球の軌道が太陽から遠ざかるほど、太陽から届く光の量が減るので、寒冷化が進みます。逆に、地球が太陽に近づくほど、日射量が増え、温暖化が進みます。また、このずれには周期がある、ということも分かっています。地球は定期的に温暖化と寒冷化を繰り返している、ということが明らかにされています。

もう一つの要素として、太陽活動の変化があげられます。太陽の活動が活発になると、太陽から放出される光の量が増え、結果として地球の温暖化が進みます。逆に、太陽の活動が低下すると、地球の寒冷化が進みます。

以上のような、いわば地球外の要素によって、地球の気候が変化することが明らかにされています。しかし、これらの要素を考えあわせても、ここ一、二百年の気温の変化は説明できないのです。

地球外の要素だけでは、温暖化を説明するのに十分ではありません。したがって、温暖化の原因は地球の内側にある、ということになります。

3・2

では、最近の二百年間において、地球の表面、あるいは内部において、何か大規模な活動が起きていたのでしょうか。

たしかに、活発な現象があったと言えます。それは人類の活動です。産業革命以来、人類が排出し続けてきた二酸化炭素の量は、地球大気の全体量と比べても、無視できる大きさではありませんでした。人類は、石油や石炭などの化石燃料を燃やすことで電気を作り、機械を動かしてきました。そして同時に、化石燃料の燃焼によって、大量の二酸化炭素を大気中に排出してきました。二酸化炭素には、温室効果があることが分かっています。つまり、二酸化炭素が増えることによって、地球表面の温度が下がりにくくなります。

地球は常に太陽の光にさらされ、温められています。しかし、太陽の熱を吸収するばかりでは、地球の温度はどこまでも上昇してしまうでしょう。そうなっていないのは、熱を吸収すると同時に、熱を放出しているからです。

熱輻射、という形で、地球は宇宙空間に向けて熱を放出し続けています。輻射とは電磁波の放射であり、地表から放出された電磁波のエネルギーの分だけ、地球は冷やされます。太陽によって温められる一方で、宇宙空間に向けて熱を放射しているのです。地球の気温はほぼ一定に保たれているのです。二酸化炭素は、この熱輻射の効率を悪くします。よって、その分だけ、地球の冷却は遅くなります。結果として、地球の温度は上昇を始めます。これが、温室効果によって温暖化が起きている、ということです。

この説明によって、ほとんどすべての現象が理解できます。事実上、これが唯一の答えと言っていいいでしょう。

3・3

しかし、だからといって、二酸化炭素が温暖化の原因であるということが、百パーセント正しいと言えるわけではありません。本当の原

因が他にあるということを、否定することはできないのです。

ここで仮に、その説明が正しいとしてみましょう。つまり、二酸化炭素以外に原因があるとしてみましょう。

その場合、我々が二酸化炭素を排出し始めるのと同時に、何らかのメカニズムが地球内部で働きだし、その結果、あたかも二酸化炭素が原因であるかのように見えている、という説明をすることになります。これは私には、こじつけにしか思えません。

それに、そもそもどうして二酸化炭素が原因ではない、と断言することができのでしょうか。二酸化炭素以外にも原因がある、という主張は、二酸化炭素が原因である、という主張と矛盾しません。原因は複数あってもよいのです。

しかし、実のところ、二酸化炭素が原因ではない、という可能性もないとは言えません。その場合、温暖化対策のために二酸化炭素を減らす必要はない、ということになるのでしょうか。

さて、ここに問題があります。

二酸化炭素は温暖化の原因ではない、ということを証明することは可能でしょうか。そもそも、ある二つの事象の間に因果関係があるかないか、ということ、どのようにして判断すればよいのでしょうか。

3・4

そのような方法が一つだけあります。それは、対照実験と呼ばれるものです。

たとえば、ある医者が、新しい薬を開発したとしましょう。その薬を売り出す前に、薬の効果を確かめてみなければなりません。そのときに行われるのが、対照実験です。

まず、その医者は、その薬が効きそうな病氣を持った人たちを集めます。そして、その人たちに薬を飲ませてみます。もしも、薬を飲んだ後で病氣が治ったならば、その薬には治療効果がある、ということが証明されるように思えます。

しかし実際には、それだけでは不十分です。もちろん、その実験も行う必要があります。薬を飲むと病氣が治る、ということを確認することは必要です。ただ、その薬に治療効果がある、ということを証明するためには、もう一つの実験を行わなければなりません。

それは、次のような実験です。まず、先ほどと同じように、病氣を持った人たちを集めてきます。そして、その人たちに、薬を飲ませないでおきます。その後、病氣が治るかどうかを見てみます。

もしも、薬を飲まない人たちの病氣が治ったならば、その薬には治療効果はない、ということになります。というのも、薬を飲んでも飲まなくても病氣が治るのですから、薬を飲む必要はありません。

一方で、もしも、薬を飲まない人たちの病氣が治らなかったならば、その薬には治療効果がある、ということが立証されます。

つまり、ある薬と病氣の治癒との間に因果関係を認めるためには、次の二つの事実を確認する必要があります。

薬を飲むと、病氣は治る。

薬を飲まない、と、病氣は治らない。

この二つの事実が確認されて初めて、因果関係を証明することができます。どちらか片方だけでは十分ではありません。これが、因果関係を証明するための最も一般的な方法です。この条件を公式化すれば、次のようになるでしょう。

Aがあるならば、Bはある。
Aがないならば、Bはない。

これら二つの条件が満たされたとき、AとBの間には因果関係があると言えます。

3・5

さて、我々の問題に戻りましょう。

現在のところ、我々が知っている事実は、「大気中の二酸化炭素が増加しているとき、温暖化が進んでいる」ということです。

しかしこれだけでは、二酸化炭素と温暖化の因果関係を証明することはできません。それを証明するためには、もう一つの実験を行う必要があります。それは、二酸化炭素が減少するときに何が起きるのか、という実験です。

もしも、二酸化炭素が減少するときに、温暖化が止まるならば、二酸化炭素は温暖化の原因である、ということが証明されます。

一方で、もしも、二酸化炭素が減少するときに、温暖化が止まらないならば、二酸化炭素は温暖化の原因ではない、ということが証明されます。

したがって、二酸化炭素が温暖化の原因であるかどうか、ということを確認するためには、いちど二酸化炭素を減らしてみる必要があります。つまり、実際に二酸化炭素を減らしてみれば、二酸化炭素が地球温暖化の原因であるかどうかは疑いの余地なく明らかになる、ということなのです。ゆえに、二酸化炭素は温暖化の原因ではない、と主張する人には、自分の主張を証明するために、二酸化炭素を削減する義務があると言えるでしょう。

結局、我々には選択肢は一つしかありません。世界中の人々と協力して、二酸化炭素の削減に向けて努力してゆかねばなりません。

4

4・1

最後に、地球温暖化の影響について考えてみましょう。

まず、地球全体が温暖化することによって、海洋の表面温度が上昇します。海洋の表面温度が一度上がるだけで、海水の蒸発量は大きく変わるはずです。そして、大気中の水蒸気量が変われば、それは当然、海洋上の天気に影響を与えます。そして、海洋上の天気が変化することで、日本上空の天気も変化するでしょう。

というのは、日本上空の大気だけが、地球上の他の地域の大気から切り離されているわけではないからです。日本の大気は、世界中の大気とつながっています。よって、海洋上の大気の状態が変化すれば、それは必ず、日本の大気の状態に影響を与えます。

さらに、地球温暖化の影響は、一過性のものではなく、持続するはずです。したがって、地球温暖化は日本の気候に影響を与える、と結論することができます。

4・2

日本の異常気象の原因は、地球温暖化です。地球温暖化の原因は、二酸化炭素の増加です。二酸化炭素増加の原因は、我々の経済活動です。つまり、我々の経済活動が、我々自身を苦しめている、ということになります。これを自業自得と言います。

自分の行動が原因となって、自分自身を苦しめているのですから、自分の行動を変えることで、問題を解決することができます。このよ
うな自覚を、一人ひとりの人間が持たねばなりません。洪水で流され
てから後悔しても遅いのです。

原子力の安全な利用について

1

原子力発電は、火力発電と違って、二酸化炭素を排出しない発電方法として知られています。ゆえに、地球温暖化を防止するためには、火力発電に代えて原子力発電を利用したほうがよい、ということは広く認識されています。しかしながら、日本人の多くは、原子力発電を好ましくないと考えています。どうしてでしょうか。

それは、原子力発電が危険だからです。

一つには、事故を起こした際の被害が大きい、ということ。

二つには、放射性廃棄物の危険性が大きい、ということ。

この二つの危険があります。そして、原発が事故を起こしうるものであることは、福島第一原子力発電所の事故によって、明確に認識されることになりました。

したがって、もしも、原子力の安全な利用法が確立されれば、それを拒否する理由もなくなるものと思われれます。

2

まず、一つ目の問題を検討しましょう。解決策は二つに分けられます。

一つ目は、原発の設計を見直し、安全性を高めること。
二つ目は、事故が起きた場合の対処方法を見直すことです。

2・1

一つ目の解決策は、核燃料をいかにして冷やすか、という問題と関係しています。福島原発の事故は、崩壊熱によって引き起こされたものです。崩壊熱とは、臨界反応が止められた後も燃料が熱を出し続ける、という核燃料特有の性質です。

正常な運転をしている原発では、発電を止めた後でも、冷却水を流し続けることによって、崩壊熱を冷まし、事故を防いでいます。しかし、何らかのトラブルによって、冷却水を流し続けることが難しくなると、燃料が熱暴走し、メルトダウンが起きてしまいます。

原発の安全性を確保するためには、反応を終えた燃料が、人の手を加えずとも、自然に冷えてくれることが望ましいのです。そのためには、軽水炉以外の発電形態を考えるか、あるいは、原発の規模を小さくし、崩壊熱の発生量を抑える必要があります。後者の場合、更に、外部環境との熱循環の方法を考えなければなりません。

いずれにせよ、現行の原子力発電所の設計では、この解決策を実現するのは難しいと言えます。新しい原発を開発する必要があるでしょう。

2・2

二つ目の解決策は、事故が起きた際に被害を抑える方法を考える、ということなのです。

まず、福島原発の事故が、どうしてもそこまで深刻化したのか、ということを考えてみましょう。

主な原因は、既に説明した通り、原発で使用する燃料のサイズが大きく、そのために、崩壊熱の発生量も大きくなり、熱暴走を起こしてしまった、ということです。

そのほかに、原発の運用思想も原因であると思われます。原発の運用においては、暗黙のうちに、核燃料を外に漏らしてはならない、ということが絶対条件として考えられています。しかし、事故が深刻化した理由を考えると、まさにその考え方が問題であることが分かります。

事故の主原因は、崩壊熱が大きくなりすぎたことでした。そして、一か所に集められる核燃料の量が増えれば増えるほど、熱量が大きくなることは明白です。

しかし、燃料を漏らしてはならない、という条件が意味することとは、燃料を一か所に集めて閉じ込めろ、ということに他なりません。ゆえに、燃料を漏らさない、という原発の運用の仕方が、結果として崩壊熱を増大させ、事故をここまで深刻化させるに至った、と言えるのです。

では、事故の深刻化を防ぐためには、どうすればよいでしょうか。

2・3

考えられる対応策は、事故が深刻化する前に自発的に燃料を漏らす、ということです。

炉心の暴走が起こりそうだと判断された場合、制御不能になる前に、燃料を細かく分けて格納容器外に放出します。そうすれば、一つの破片のもつ熱量は小さくて済みます。また、燃料を露天に曝す

ことで、熱を冷ますことも容易になるでしょう。さらに、事故の後処理を行う際の困難も減るものと思われます。

福島原発一号機では、巨大なデブリの存在が事故処理を難しくしています。しかし、今述べたような対処を行うならば、そのような問題は生じなくなるでしょう。

2・4

また、この考え方を応用するならば、デブリの処理にも道が開けるかもしれません。

デブリの処理が難しいのは、それが強力な放射線を発しているからです。そして、それが強力な放射線を発しているのは、大量の放射性物質が一か所に集まっているからです。したがって、デブリを安全に処理するためには、デブリを分解すればよいのです。

一つの案として、デブリの爆破が考えられます。

どういふことかと言えば、遠隔操作ロボットを使って、デブリの中心部に大量の爆薬を持ち込み、デブリ全体を爆破します。内側から爆発させることで、デブリを細かい破片に分解することができます。また、爆風によって破片が散らばるために、デブリ周辺の放射線量は薄められるでしょう。そうすれば、今よりも処理は易しくなるはずです。

もちろん、この通りの処置を行う必要はありません。爆発によって何が起きるかわかりませんので、今まで通り慎重に作業を進めたほうがよい、という意見もあるでしょう。

しかし、考え方は間違っていないはずで、放射性物質は一か所に集めておくから危険なのです。それを安全に取り扱うためには、ばらばらに分解してしまうのが最もよい方法です。

2・5

ここで述べたことは緊急処置にすぎません。事故を起こさないことが第一であることに変わりはありません。しかし、それを運用する者の心の持ち方によって、事故の可能性は変わってきます。

絶対に漏らしてはいけない、という考え方は、人の心を縛ります。そのように考えてしまうと、自由に動けなくなってしまうです。むしろ、漏らしてもよい、と考えたほうが、自由に動けるはずですよ。そして、自由に行動できるということが、事故の確率を減らすでしょう。失敗した人間を指さして笑っているようでは、社会全体の成長は望めません。

恥をかく勇気が必要です。恥をかく勇気があれば、失敗した人間を笑うことはできなくなります。それが本当の進歩です。

3

3・1

次に、二つ目の問題に移ります。

原発を運用することで、大量の放射性廃棄物が発生します。これをどのように処理すればよいか、ということが大きな問題となります。

この問題について考える場合、廃棄物を二種類に分けて考える必要があります。

一つ目は、寿命の短い放射性物質です。

二つ目は、寿命の長い放射性物質、具体的にはプルトニウムと、その他の超ウラン元素です。

放射性廃棄物の処理に関しては、二つの段階に分けて考えるべきだと思います。まず、プルトニウム等の寿命の長い元素を、寿命の短い元素や、より安定な元素に変換する段階です。次に、寿命の短い元素の処分を行います。

廃棄物の地層処分ということが言われていますが、それは論外です。プルトニウムを含む廃棄物が無毒化するまでには、十万年以上の時間が必要です。そのような長い時間にわたって人類が放射性物質を管理し続けるということは、事実上不可能です。言葉の上で約束することは簡単ですが、それは嘘をつくことと同じです。

地層処分を正当化するためには、廃棄物を構成する放射性物質の寿命を、短く抑えなければなりません。そのためには、プルトニウムを他の元素に変換する技術、いわゆるプルトニウムを燃やす技術を洗練させなければなりません。

3・2

核開発とは何でしょうか。

核開発、という言葉が意味することは、プルトニウムを作る、ということですよ。第二次大戦中のアメリカで行われたマンハッタン計画により、人類の核技術は大きく進歩しました。この計画によって、プルトニウムを製造する技術が確立されたと言えます。

しかしながら、それは、人類が持つべき核技術の半分ではありません。残りの半分とは、プルトニウムを捨てる技術です。プルトニウムを焼却する技術が完成されて初めて、人類の原子力技術は完成したと言えます。新しい時代の核開発とは、プルトニウムを焼却する手段を開発することです。

3・3

この問題は、原子力の、発電のための利用に限るものではありません。原子力の兵器としての利用を考える場合にも、このことは大きな意味を持ちます。

核兵器の放棄、ということがよく言われますが、これは口で言うほど簡単なことはありません。なぜならば、捨てるようにも捨てられないからです。

核兵器の燃料として主に使われているのは、プルトニウムです。しかし、それを捨てる技術がまだ存在していません。ゆえに、核兵器の放棄は事実上不可能です。現在我々が置かれている困難な状況は、すべてここに原因があります。

3・4

核兵器を保有している国々は、なぜかは分かりませんが、それを手放すことを嫌がります。人道的な観点からは、それを手放すことが望ましいのですが、同時に彼らは、それを手元に置いておくことを望みます。ゆえに、彼らにとっては、プルトニウムを焼却する手段は存在しないほうがよいのです。

本当は手放したいが、そうするための手段がないのだ、ということが、彼らにとつての言い訳になります。それによって、人道的な仮面を被りつつ、核兵器を保有しておくことが可能になります。

おそらくこのような政治の在り方が、無意識のうちに、新しい技術の開発を抑制し続けてきたのではないのでしょうか。

3・5

プルトニウムを焼却することは、原理的には可能です。技術的に難しいと言われていますが、不可能ではないはずです。

我々には、マンハッタン計画のように、新しい技術を生み出すことが期待されています。新しい計画は、地球上に存在する全てのプルトニウムの焼却をその使命とすることになるでしょう。大げさに言うならば、この計画には人類の未来がかかっています。

3・6

個人的な提案ですが、できるだけ多くの科学者に、原子力の問題について研究を行ってほしいと考えています。

素粒子物理学は、いったん終わりにしてもよいのではないのでしょうか。すでにヒッグス粒子は見つかっています。もっと実用的な研究に集中してほしい、というのが、私の率直な思いです。東北にリニアコライダーを作っている場合ではないと思います。

4

最後に、核の抑止力について考えてみましょう。核攻撃に対する最も強い抑止力とは、何でしょうか。

それは、核を持たないことです。なぜならば、核を持たない国に対して、核攻撃を行う理由がないからです。もしもそのような攻撃が行われた場合、その行為をどうやって正当化すればよいのか、私には分かりません。

また、相手に核兵器を使わせないために核兵器を作るのだとすると、どちらの側にも、はじめから核兵器を使用するつもりがないことになります。どうせ使わない兵器ならば、無くても同じです。

核兵器を保有すること自体、コストがかかります。また、プルトニウムが存在することによる潜在的な脅威もあります。核兵器を所有することによるメリットが、一体どこにあるのでしょうか。

人を殺したいのならば、マシンガンで十分用は足ります。結局のところ、面と向かって殺し合いをするほうが人間の性に合っているのでしょう。核攻撃だけで戦争が終わってしまったら、かえって物足りないかもしれません。

世界の分割

1

先の論考で、地球上のすべてのプルトニウムを廃棄する、という計画を提案しました。これが可能かどうかは分かりませんが、不可能であることが証明されない間は、この計画を進めることにも何らかの正当性があると言えるでしょう。

しかし、もしかすると、この計画にあからさまに反対する国があるかもしれません。核開発をうまく進めるためには、世界中で足並みをそろえる必要があります。したがって、もしもそのような国があったならば、何らかの圧力をかけてこの計画に従わせる、ということも視野に入れねばなりません。

私が念頭に置いているのは、アメリカです。

2

以下の話はただの想定です。

たとえば、日本と中国と韓国のGDPを合わせれば、アメリカに匹敵する規模になるでしょう。この三国が力を合わせれば、アメリカに圧力をかけることも不可能ではないと思われます。

もしも、日本と韓国が同時に離反したならば、そして、この二国が中国と軍事同盟を結んだならば、アメリカにどのような対処が可能でしょうか。それは、アメリカに対する圧力となりうるのではないのでしょうか。

しかし、これだけでは十分ではありません。このままでは、ヨーロッパを見逃してしまうことになります。ヨーロッパとアメリカの人々は、基本的な価値観と文化を共有しています。したがって、もしもヨーロッパに何の対処も行わないならば、アメリカに逃げ道を用意することになるでしょう。

しかしながら、東アジアの国々の力だけでは、ヨーロッパにも同時に圧力をかけることは不可能です。ヨーロッパは、また別の勢力に対処してもらわねばなりません。

イスラム諸国家は、現在のところ、互いに反目し合っているように見えます。しかし、もしも彼らが協力し合い、団結することができれば、イスラム圏はヨーロッパに対抗しうる勢力となるでしょう。それが実現できたならば、彼らにヨーロッパを押さえってもらうことができます。

ヨーロッパ対イスラム。

アメリカ対東アジア。

これが、世界の分割、天下三分の計です。

3

三分とは、大雑把に言えば、仏教文化圏、イスラム教文化圏、キリスト教文化圏の三つに世界を分けることです。これである程度、力のバランスがとれるのではないのでしょうか。この構図が実現したなら

ば、アメリカに圧力をかけるといことも不可能ではないはずで

4

しかし、日本と中国が手を組むことなど可能でしょうか。そこ
どのような道理があるのでしょ

まず、九・一一同時多発テロから話を始め

あのようなテロが引き起こされた原因については、様々な分析がな
されています。しかし基本的には、アメリカの中東・中央アジア問題
に対する介入が、テロ組織アルカイダを生み出した、言うことがで
きると思います。

たとえば、一九八〇年に始まったイラン・イラク戦争において、ア
メリカやヨーロッパ諸国はイラクのサダム・フセインを支持し、援助
を与えました。また、ソ連のアフガン侵攻に際して、アメリカはソ連
に敵対するイスラム勢力を支援し続け

欧米諸国は、中東で騒動が起こるたびに軍事支援を行い、武器を提
供し、火に油を注ぎました。現地

彼らはなぜ、そのようなことをするのでしょうか。

それは、イスラム教徒同士に、また一般に、自国に敵対する勢力
同士に、殺し合いをさせるためです。イスラム教徒が互いに殺し合え
ば、彼らの力は削がれます。それによつて漁夫の利を得るのは、アメ
リカやヨーロッパ諸国です。アメリカは、イスラム教徒に殺し合いを
させるために、彼らに武器を与えてきたのです。

しかし、そのような行いは許されるべきではありません。そして実

際に、アメリカはしつぺ返しを受けることになります。それが、九・
一一のテロリズムなのです。

5

さて、このようなアメリカ人の行動原理は、昔から少しも変わって
いません。以前は中国において、このような活動が行われていました。

日中戦争が行われている間、蒋介石は、イギリスとアメリカから武
器の支援を受け続けていました。それによつて彼は、いつまでも戦争
を続けることが可能になったのです。その結果、日本人と中国人は果
てしない殺し合いをすることになりました。アメリカの目的は、それ
によつて日中双方の力を削ぐことだったのでしょ

このことに関して、アメリカはしつぺ返しを受けたでし

たしかに受けました。それが、太平洋戦争です。

日中戦争における蒋介石の役割は、イラン・イラク戦争におけるサ
ダム・フセインと同じです。彼は利用されるだけ利用され、戦争が終
わったとたんに捨てられたのです。

私たちは、欧米人のこのような行いを黙って見過ごすべきではあり
ません。私たちは今まで、許すべきでないことまで、許してしまつて
いたのではないでし

6

他人に殺し合いをさせるために武器を与えるという行為は、人とし
て間違っています。

しかし、キリスト教徒は人ではありません。彼らは動物と同じです。彼らには、やってよいことと悪いことの区別がついていないのです。彼らは、自分の過去の行いから学習することができません。そのため、同じ過ちを何度でも繰り返してしまいます。

より大きな罪を犯さなければ、より小さな罪が許されるわけではありません。それぞれの罪には、その大きさに応じた報いが待っています。自らの行いの報いから逃れることはできません。

人間には、やっていいことと悪いことがあります。

日本人であれば、この言葉を幼いころから聞かされて育っています。しかし、ヨーロッパの人びとは、まだ一度も、誰からも、そのようなことを教わっていないのです。ゆえに、彼らに物の道理を教えることは、日本人の義務です。ヨーロッパの文明は極端に原始的で、幼稚なものです。アジア人の精神文化を、四十五歳の成熟した大人にたとえるならば、ヨーロッパの文明は十二歳の子供にたとえられるでしょう。

彼らはまだ仏陀を知りません。私たちは、人としての基本的な心構えを、彼らに教えてやらねばなりません。

7

以上が、天下三分を正当化するロジックです。

要約すれば、日本にとって本当の敵は中国ではない。中国にとっても、本当の敵は日本ではない。本当の敵はアメリカなのだ、ということです。

理屈はいくらでも付くものです。

これと同じロジックによって、イスラム諸国がまとまってくれればよいのですが、それは期待しすぎかもしれません。イスラム教徒は石頭だから。

キリスト教の問題

1

キリスト教の教義には矛盾があります。この論考で、それを明らかにしようと思います。

キリスト教徒とは、次の二種類の命題を信じている者のことです。

一つ目は、イエスは神であるということ。

二つ目は、イエスは一度死に、その後復活したということ。

以上の二種類の命題を両方ともに信じている者が、キリスト教徒である、ということにしましょう。

2

さて、イエスが神である、という一つ目の命題が真であるとしてみましょう。

このことは、イエスと神とが同一のものである、ということの意味します。では、一体誰が、イエスを生き返らせたのでしょうか。というのも、もしも、イエスと神とが同一のものであるならば、イエスが死んだとき、同時に神も死んだのでなければならぬからです。

たとえば、二人の人物A、Bがいるとしましょう。もしも、Aが死んでいる間、Bが生きていたとしたら、この二人は同一人物ではあ

りえません。もしもAとBが、同一人物の二つの異なる名前であったならば、AとBの生死は一致していなければなりません。

したがって、イエスが神であるならば、イエスが死んでいる間、神もまた死んでいたことになります。しかし、死んでいる神にイエスを生き返らせることはできません。では、一体誰がイエスを生き返らせたのでしょうか。それが神でないとしたら、悪魔でしょうか。

一つ目の命題が真であるならば、二つ目の命題は成り立たないのです。

3

次に、イエスが復活した、という二つ目の命題が真であるとしてみましょう。

この場合、イエスが死んでいる間、神は生きているのでなければなりません。なぜならば、神にしか、死んでいるイエスを蘇らせることはできないからです。

したがって、イエスが死んでいる間、神は生きていたことになりました。この場合、イエスと神とは同一ではありません。

よって、二つ目の命題が真であるならば、一つ目の命題は成り立ちません。

4

最後に、一つ目の命題が真であり、かつ、イエスと神とが共に生きていた、という場合を考えてみましょう。

この場合、イエスが死んだ、というのは、地上の人間の目にそう見えていただけであって、実際には死んでいなかった、ということになります。

ゆえに、この場合でも、イエスの復活は成り立ちません。イエスは一度も死んでいないのですから。

5

以上の考察から、二つの命題が二律背反の関係にあることが分かります。一方が正しいならば、もう一方は必ず誤りです。

しかし、キリスト教徒の信仰とは、この二つの命題を二つともに信じることでした。したがって、全てのキリスト教徒は、少なくとも一つは必ず誤った命題を信じている、ということになります。ゆえに、キリスト教の信仰を持つことは、それ自体が誤りである、と言うことができます。

このような信仰を認めることはできません。

6

では、正しい信仰とは何でしょうか。

正しい信仰とは、正しい考えを信じることです。

正しい考えとは、仏の教えです。

ゆえに、正しい信仰とは、仏の教えを信じることです。

7

我々は、信教の自由を認めるべきではありません。正しい信仰は認められるべきですが、間違った信仰を認めるべきではありません。

しかし、私は特に、憲法を改正すべきだ、と言いたいわけではありません。私の知る限り、日本の憲法には「篤く三宝を敬え」と記されています。三宝とは、仏と、仏の教えと、修行者の集まりです。

日本にはすでに、このような憲法があります。

仏教は日本の礎です。

戦争について

1

ここで一度、戦争について考えてみたいと思います。
戦争とは何でしょうか。戦争の勝敗は何によって決まるのでしょうか。

2

まず、ナチスドイツの敗因について考えてみましょう。
当時のドイツの軍事力は強大でしたが、連合国側が攻勢に転じると、為す術なく敗れてしまいました。
どうしてでしょうか。

ナチスにとって、戦争とは何だったのでしょうか。
おそらく彼らは、人間を殺すことを戦争だと考えていたのでしょうか。
彼らのユダヤ人に対する態度を見ると、それが分かります。彼らはユダヤ人を殺すことで、ユダヤ人に勝とうとしていたのです。
しかし、それは上手くいきませんでした。彼らはホロコーストによって、大量のユダヤ人を殺害しました。しかし現在では、世界中にユダヤ人が溢れています。

つまり、ユダヤ人は、殺せば殺すほど増えるのです。それなのにナチスは、彼らを殺すことで、彼らに勝とうとしました。それが誤りだったのです。

3

一般的に言って、あなたが殺せば殺すほど、敵は増えます。なぜでしょうか。

3・1

まず、人間は自然に増えます。
例えばあなたが、ある人間集団を疎ましく思っているとしみましょう。
あなたは、彼らを一人残らず殺害することで、彼らを排除しよう、と考えているとします。あなたは着実に、一人ずつ殺してゆくことでしょう。
しかし、殺されるほうも黙っているわけではありません。彼ら自身が非力であったとしても、まず抵抗し、そして助けを求めます。おそらく、彼らの声を聞きつけた第三者が止めに入ってしまうでしょう。邪魔が入ることによって、あなたは、彼らの一部を取り逃がしてしまうかもしれません。
逃げ出した人々は、別の場所に移り住むでしょう。世界は広いのですから、隠れ場所が見つからないとは限りません。やがて彼らは数を増やし、あなたに復讐する機会を待ち続けるでしょう。それはいずれ、あなたの身に災難を引き起こすはずです。

3・2

次に、例えば、あなたの軍隊が外国に攻め込んだとします。そこであなたは、人を殺し始めます。

人を殺すという行為は、殺されなかった人々の心にも、必ず反感を作り出します。あなたが人を殺し続けるならば、その土地の人々の心には、次第にあなたへの不信が育ってゆきます。やがて、初めは協力的だった人々も、新しくあなたの敵に加わるようになるでしょう。そのようにして、あなたが殺せば殺すほど、敵は増えるのです。

人は、自分に対してなされた悪を忘れないだけでなく、自分の同胞に対してなされた悪をも、決して忘れないものです。

再び、ナチスを例にとってみましょう。

彼らは、国内のユダヤ人を迫害し続けました。それによって、周辺地域に住むユダヤ人たちに、非常に強い敵対心を植え付けました。それが結局は、彼らを滅ぼすことになったのです。

敵を殺すことで戦争に勝とうとすることは、最も成功する可能性が低い戦略です。

3・3

アフガニスタンで戦っているアメリカ人兵士は、次のように考えているかもしれません。いくら殺しても、次から次と敵が現れるのは不思議である、と。しかし既に述べたように、この二つの事象の間には明確な因果関係が存在します。

この道理を理解することができないならば、あなたは決して戦争に勝つことはできないでしょう。しかし、もしもこの道理が正しく理解

できたならば、世界で最も強大な軍隊でさえ、あなたの敵ではないでしょう。

もしもあなたが、戦争を終わらせたくないならば、敵を殺し続けられよいでしょう。殺せば殺すほど敵は増えるので、いつまでも戦争を続けることができます。

もしもあなたが本当に、戦争を終わらせたい、と考えているならば、敵を殺してはいけません。別の方法をとる必要があります。

4

4・1

では、戦争に勝つためには何をすればよいのでしょうか。

それを知るためには、どんな条件が達成されたときに戦争が終わるのか、ということを考える必要があります。

敵の首都を占領したときに、戦争は終わるのでしょうか。

しかし、たとえば、ナポレオンはモスクワを占領しましたが、戦争には負けました。また、日本軍は南京を占領しましたが、戦争には負けました。そして、アメリカ軍がカーブルを制圧したとき、そのときに戦争は始まったのです。

したがって、首都を制圧することは、戦争終了の条件ではありません。では、いったい何をすれば戦争は終わるのでしょうか。

4・2

答えは、民衆が新しい政府を支持したとき、戦争は終わります。

もしも民衆の心に、新政府に対する反感が強く残っているならば、戦争はいつ再燃してもおかしくはありません。あなたが民衆の信頼を勝ち取ったときに、戦争は本当の意味で終わるのです。

したがって、敵を殺すことは控えなければなりません。その代わりに、あなたは、あなたの敵が欲するものを、また、彼らにとって最も価値あるものを、彼らが望むままに、与えてやらなければなりません。そうすることで、彼らを心服させることができ、信頼を得ることができるようでしょう。その結果として、あなたは勝利をつかむことができます。しかし、そんなことが本当に可能でしょうか。

4・3

ナチスドイツや、大日本帝国の統治下にあった人々に対しては、彼らの望むものを与えてやることは簡単でした。ただ、彼らの政府を倒せばよかったのですから。しかし、現代においては、戦争に勝つことはいつそう難しくなっています。

私に言えるのは、次のことです。

大義を失ってはいけません。

大義があれば戦争に勝てる、ということはありますが、それを失えば確実に負けます。

あなたは、どうすれば戦争に勝てるか、ということを実際に考えなければなりません。

第II部

過去の再認識

南京虐殺

1

一九三八年十月、日本軍が漢口に入城するときに、司令部は各部隊に厳重な注意を与えました。第十一軍司令部「機密作戦日誌」に、次のような記録があります。[†]読みやすさのため、カタカナはひらがなに改めました。

「南京攻略戦に於ける南京城進入の無統制に起因し、進入後幾多の不祥事を発生せしめたる苦き経験に鑑み、武漢進入は不祥事の絶無を期すると共に、諸般に亘り整然且つ円滑を期する為、中支作命第二百二十五号及び之に基づく軍参謀長指示を以て、懇切に命令せられたり」

「中支作命第二百二十五号」等の命令は、整然とした軍隊行動を指示し、また、放火や略奪などの不法行為を厳しく禁じる内容でした。この記録には、南京における不祥事について簡単な言及があります。これに限らず、日本軍の記録の所々に、南京入城の際に、日本兵が起した事件に関する記述が見られます。その事件は記録の中で、不祥事や軍紀の乱れといった言葉で表現されています。

日本側の記録を見ただけでも、南京において、日本兵が何らかの事件を起こしたことは明らかです。

しかし、それがどんな事件であったのか、という具体的な記述は、

[†] 児島襄「日中戦争 VOL.3」文藝春秋、一九八四年

ほとんど残されていません。我々は、そこで何かが起きた、ということを知ることができます。しかし、日本側の記録を見る限りでは、そこで何があったのか、ということを知ることにはできません。その部分だけが、まるで消しゴムで消されたかのように、きれいに空白になっています。

ある意味では、それで十分です。そこが空白であるということは、そこに、彼らが消したくなるような何かがあった、ということ了我々に知らせます。それが何であったのか、ということを彼らは我々に伝えませんでした。それを知る術は永久に失われているのかもしれない。

しかし、たとえそうだとしても、事実は事実です。それが何であったのか、ということ了我々が知らなかったとしても、それは事実です。それを無かったことにはできません。

2

しかしながら、南京陥落の責任を日本政府に帰すのは誤りです。南京が陥落したことの責任は、当時、南京を守っていた中国国民政府にあり、日本政府にはありません。中国人の生命に対して責任を負っているのは、中国の政府であって、日本政府ではありません。

たしかに日本兵は南京で悪事をはたらきました。それは、組織的な虐殺行為といったものではなく、個人的な犯罪行為に近いものだったのでしょうか。ゆえに、それは、軍隊の内部で裁かれるべき事柄です。他の場所で裁かれるべきではありません。

どんな罪であれ、それを裁くためには規則が必要です。さもないければ、同じ罪によって、同じ人間が何度も裁かれてしまう、ということ

になりかねません。それはあってはならないことです。

軍人の不法行為は軍隊が処罰するべきです。したがって、日本兵の悪事に対する処罰は、日本軍が行うべきでした。その義務を怠ったことが、日本の落ち度だったと言えるでしょう。当時の日本兵の振る舞いは、ならず者と変わらなかったのかもしれませんが。

真珠湾奇襲

1

奇襲攻撃は兵法の常です。奇襲を仕掛けてきたことに関して、敵に文句をつけるのは筋違いです。味方が奇襲を受けたことをこそ、恥じるべきです。真珠湾攻撃に関して言えば、非難されるべきはアメリカ政府でしょう。

当時のワシントンは、普段から日本大使館の無線通信を傍受し、その内容を把握していました。したがって、日本政府に戦端を開く意思があることも、事前に知っていたと考えられます。にもかかわらず、アメリカ政府は、その情報を現地の将兵に伝えませんでした。もしも、ルーズベルト大統領が、アメリカ軍のすべての部隊に日米開戦の事実を伝えていたならば、真珠湾への奇襲は防げたかもしれません。では、どうして彼は、その情報を秘密にしておいたのでしょうか。どうしてアメリカは、日本よりも先に宣戦を布告しなかったのでしょうか。

もしも大統領が、あえてその情報を漏らさなかったのだとすれば、彼は、世論を操作するために、あるいは他の何らかの目的のために、軍人を見殺しにするつもりだったことになります。また、もしも、あの戦争の目的が、アメリカ国民の生命を守ることだったのだとすれば、

ば、アメリカ軍の兵士は、アメリカ国民ではなかった、ということになります。

一方で、もしも大統領が、その情報をすぐにも全軍に伝えなければならぬ、ということに気づいていなかったのだとすれば、彼はただの愚か者です。この場合、その後の彼の行動には、弁明の余地はありません。彼は、自分の失敗を隠すために、日本人を抹殺しようとしたのでしょうか。

したがってルーズベルトは、卑怯者であったか、さもないれば愚か者であった、ということになります。日米開戦の際に卑劣な振る舞いをしたのは、アメリカ政府であって、日本政府ではありません。

1・1

ヒトラーがポーランドに侵攻するとき、「ポーランド人がドイツのラジオ局を襲撃した」ことを、その口実としました。しかし、それはドイツ政府のつち上げであり、実際には一人の犠牲者も出ていなかったのです。

一方で、ルーズベルトは、戦争の口実を作るために、二千人以上のアメリカ人を犠牲にしました。一国の指導者として、どちらがより優れていたのか、明らかではないでしょうか。

アメリカ政府は、諜報活動によって手に入れた情報を、有効に活用する術を知りませんでした。彼らはそれを、自国民を殺すために用いたのです。

2

一般的に言って、武装していない相手への攻撃は道義にもとりま
す。しかし、武装した相手への奇襲攻撃は間違いとは言えません。

兵隊はマシンガンを持っています。一体マシンガンには、人を殺す
以外の、他のいかなる用途で使われることが想定されているのでしょ
うか。

マシンガンは、人を殺すための道具です。よって、兵隊がマシンガ
ンを持っているのは、人を殺すためです。ゆえに、軍隊は、人を殺す
ために存在します。それは、他国の人間を殺すために存在しています。

ある国が軍隊を持っているということは、その国に、他国に対する
敵意があることを証明しています。そのような国には、奇襲攻撃に対
して文句を言う権利はありません。

軍隊とは、その存在自体が不吉なものです。

原爆投下

1

一九四五年八月、広島と長崎に原子爆弾が投下されました。この出来事は、現在の世界にどのような影響を及ぼしているのでしょうか。

2

現在の世界において、核の抑止力が機能しているのは、アメリカが核兵器を恐れているからです。アメリカは、核保有国に対して脅威を感じています。そのため、ある国が核兵器を保有したならば、その国は、アメリカに対して優位に立つことができます。つまり、核の抑止力とは、アメリカに対する抑止力を意味しています。

では、どうして彼らは、それほどまでに核兵器を恐れるのでしょうか。

アメリカは、彼らにとつての敵が、核兵器を先制使用する可能性がある、と考えています。なぜなら自分自身が、過去に一度それをやっているからです。アメリカ自身の過去の行動が、核の先制使用の可能性を証明しています。したがって、自国による核兵器の使用を正当化し続ける限り、彼らは核の恐怖から逃れることができません。

3

しかし、もしもアメリカが、日本への原爆投下を誤りであったと認めるならば、彼らにはもはや、核を恐れる理由はなくなるでしょう。アメリカは堂々と、核の先制使用は不正行為である、と宣言できます。そうなれば、世界はようやく、この異常な事態から解放されることとなります。

アメリカが謝れば、日本は許すでしょう。
アメリカ人に足りないのは、自分の非を認める勇気です。

天皇の役割

1

日本人は、アメリカ人に対して借りがありません。

終戦の後、アメリカ人には、天皇を殺すこともできました。しかし彼らは、天皇を見逃しました。日本人にとっては、これ以上に大きな恩はありません。

おそらく、天皇が処刑されていたならば、日本の復興はありえなかったでしょう。戦争が終わった後も、しばらくの間はひどい混乱が続いていたはずです。アメリカの選択は、日本人にとっては完全に正しいものでした。

もしかすると彼らは、そのことの意味を理解していたわけではなかったのかもしれませんが。彼らは、ロシアとの戦いを見据えて、自分たちにとって最善の選択をしたただけだったのでしょう。

しかし、たとえそうだとしても、恩は恩です。戦後の処理を考えるならば、彼らの選択は最善でした。問題は、今のアメリカには、そのような判断をできる人物がいらない、ということでしょう。

2

最近のアメリカ人の行いは、ひどいものです。彼らはイラクに乗り込んで、真っ先にフセインを殺しました。そんなことをしたら、イラク人は立ち直れなくなるでしょう。イラクの戦後を考えるならば、フセインは殺すべきではなかった。それは明らかです。

そもそも、戦争を行う必要はありませんでした。どんな民族でも、侵入者に対しては頑強に抵抗します。しかし、どんな民族でも、身内には弱いのです。アメリカ人が心掛けるべきことは、イラク人の身内になるということです。

簡単に言えば、ブツシュがフセインの娘と結婚すればよかったのです。そうすれば、戦争をする必要もなかったはずです。

欧米人はいつでも、他人の命よりも、自分自身の価値観を優先します。そのような価値観に、一体どんな価値があるのでしょうか。

3

日本人は、アメリカ人に対して恩があります。

恩を感じたときに、恩返しをしようとすることは、人として自然なことだと言えるでしょう。そして、恩返しが終わったならば、二人の関係は解消されます。これも自然なことです。日本人は、アメリカに対する忠義を貫くべきでしょうか。

民主主義

1

民主主義という政治形態は、ある種の精神病と似ています。

民主主義国家において、政府の行動に対して最終的に責任を負うのは、国民です。国家の主権が国民にあるということは、その責任も国民にあるということです。したがって、政府には、自分の行動に対して責任を負う能力がありません。

民主主義は、そのような政治体制を持つ国家の国民にとっては、よい制度なのだと思います。政府が国民の考えに従わねばならないということは、国民の利益になるでしょう。

しかし、世界の他の国々から見れば、民主主義国家は非常に迷惑な存在です。その国の政府には、自国の行動を決定する能力はなく、責任を負う能力すらありません。それらの能力は政府の外、国民の中にあるのです。これではまるで、国家の人格が二つに分裂しているかのようです。

民主主義的な手続きによって選ばれた政府は、国民に対して責任を負っています。これを裏面から見れば、その政府は他の何に対しても責任を負わない、ということになります。つまり民主主義体制において、政府は、自国民に対して負っている責任が大きすぎるために、他国に対する責任を果たせなくなっているのです。

2

ある国が民主主義国家と交渉をしようとすれば、その国の政府と交渉をするしかありません。しかしその政府には、相手国との約束を守る能力などないのです。

国際社会の構成員として見るならば、民主主義国家は子供と同じです。判断力も責任能力もないのに、自国の利益が損なわれると、怒ります。このような国家が存在する限り、国際的な秩序を構築することは不可能です。

たとえば民主主義国家が、戦争を始める、という決断をすることはとても難しいと言えます。なぜならば、実際に戦場で死ぬことになるのは、政府の間人ではなく、国民だからです。国民は何よりも、自身と家族の死を回避しようと考えてでしょう。

しかし、国家の存続と利益のためには、戦争を行うほうが望ましい、という状況も実際にあります。このような場合には、政府の意思は、国民の意思と真つ向から対立します。民主主義の欠点があらわになるのは、このようなときです。

政治家は、国民の考えを誘導するために、自分自身も望まないような行動を強いられることになるでしょう。彼にとっては、はたから見れば不合理な行動をとることが、目的を達成するための最良の手段となります。

ルーズベルトは、このような、いわば民主主義の罠に嵌ってしまっただと考えられます。

目的の追究

1

我々はこれから、日米戦争の原因について考察を行いたいと思います。原因とは、なぜ戦争が始められたのか、という理由であり、つまり戦争の目的です。ここでは特に、アメリカ側の戦争目的に焦点を当てたいと思います。

1・1

まず、次のことを確認しておく必要があります。

真珠湾攻撃までの期間、アメリカ政府は、国民に対して、日本との間に友好的な関係が続いている、という発表を続けていました。そして攻撃の直後に、これは日本のだまし討ちである、という説明を行いました。

しかし実際には、それ以前から、アメリカ政府は日本に対する経済制裁を強めていました。さらに、真珠湾攻撃の二週間前に、実質的な最後通牒と言えるハル・ノートを日本大使に手渡していました。また彼らは、日本との戦争当事国である中国に対して、公然と軍事的な支援を行っていました。そのような行いは、決して中立なものとは言えず、戦争行為とみなされるべきです。

アメリカ国内では、戦争中の国家への武器の貸与は、戦争に加担するものではない、と考えられているようですが、そんなおかしい理屈はありません。アメリカ議会が武器貸与法を可決した時点で、日本との戦争は始まっていたと考えるべきです。

以上の事実から、アメリカ政府は、真珠湾事件以前に、公式な宣戦布告は行っていなかったものの、非公式に日本に対して戦争状態に入っていた、と言えるでしょう。

そもそもアメリカ政府には、宣戦布告を行う権限はありません。その権限は連邦議会が握っています。そのためアメリカ政府は、宣戦布告を必要としない範囲で可能なあらゆる手段を用いて、日本への敵対的行為を繰り返し、日本との対立を決定的なものにしたのです。

1・2

では、なぜ彼らは、そのような振る舞いをしたのでしょうか。

アメリカ政府はこのとき、日本を相手に危険なチキンゲームに興じていました。その結果が日米の武力衝突であることは、彼らにも分かっていたはずですが、したがって、アメリカ政府には、日本と戦争を始める意志があった、と考えざるをえません。さもなければ、アメリカ政府高官は、自分たちの行動の結果も予想できないような能無しだらけだった、ということになるでしょう。

しかし、当時のアメリカの世論は、戦争に反対する意見が優勢でした。つまり、政府の意志は、国民の意志に反していたと言えます。

国民の意志は議会に反映されます。そして、宣戦布告を行う権限は議会にあります。つまり、国民世論を味方につけなければ、アメリカ政府は議会に宣戦布告を行わせることができず、したがって、戦争を始めることができない、ということになります。

では、反戦に傾いていた国民世論を、戦争に賛成する方向へ変えるためには、どうすればよいでしょうか。

当時のアメリカ政府が出した答えが、相手に先に手を出させる、というものでした。つまり、日本が先制攻撃を行えば、国民も反撃を求めざるをえないだろう、ということです。それを実現するために、上述したような挑発外交が行われたのです。

そして肝心な点は、そのような政府の行いは、国民にばれてはいけない、ということです。世論を操作するためには、政府は、自分の意図を国民に悟られるわけにはいきません。それが暴かれた瞬間に、世論操作は失敗します。

そのためアメリカ政府は、国民の目から自分たちの行いを隠し、事実に対する発表を続けました。ゆえに、当時のアメリカ国民は、日米関係の実態についてほとんど何も知りませんでした。だからこそ「恥辱の日」演説を信じ込み、戦争へと向かったのです。[†]

ある意味では、民主主義は虚偽によって成り立っています。アメリカ人にとって本当の敵は、日本ではなく、アメリカ政府だったのです。

2

さて、はじめの問題に戻りましょう。

いったいアメリカ政府は、どのような目的のために、国民を騙してまで戦争を始めようとしたのでしょうか。

2・1

それは、アジアの人々を日本の侵略から解放するためでしょうか。しかし、それは違います。なぜならば、日本軍の仏印進駐は、アメリカによる蒋介石への支援ルートを遮断するために行われたものだったからです。つまり、実際には、アメリカ政府の行動が、日本による侵略行為の原因となっているのです。したがって、この説明は成り立ちません。

また、もしも本当にそれが目標だったのだとしたら、彼らはこの時点で、目標の達成に失敗していたと言わざるをえません。

2・2

では、太平洋地域におけるアメリカ合衆国の利益を守ることが、その目的だったのでしょうか。

それも違うと言えるでしょう。この場合、ソ連の対日参戦が説明できなくなります。ソ連の参戦はヤルタ会談において、ルーズベルトの同意の下に決定されました。しかしそれは、ソ連とアメリカの対立においては、ソ連に有利な決定であり、むしろアメリカの国益を大きく損なうものでした。

ゆえに、アメリカ政府の目的は、アメリカの国益ではありえませんが、では、いったい何が目的だったのでしょうか。

2・3

ここで、ルーズベルト大統領によって主張された、無条件降伏という要求について考える必要があります。私はこれを、基本的には日本

[†] チャールズ・A・ビーアド「ルーズベルトの責任（上・下）」藤原書店、二〇一一年

に対する要求であったと理解しています。

一般的に言って、敵に対して降伏を勧告するときには、何らかの条件を付けた方が降伏は容易になります。これこれの条件は認めるから降伏しなさい、ということは、相手に対する譲歩を意味しています。逆に言えば、無条件降伏とは、相手との交渉の余地を認めず、ある意味では降伏そのものを認めない、という態度を表現していると考えられます。

つまり無条件降伏とは、文字通りに理解すれば、勝者への絶対的服従を意味しています。ルーズベルトは、この言葉をそのままの意味で使っていたと考えるべきでしょう。一方で、ソ連の参戦に関する合意は、アメリカの勝利を確実にするためと考えることができます。

すると、ルーズベルトの考えはこうなります。北からはソ連が日本本土に侵攻し、南からはアメリカ軍が上陸を始める。そのようにして、南北東西から日本列島を取り囲み、日本人の逃げ場をふさいで、一網打尽にしよう、ということなのです。

2・4

では、相手の降伏を認めず、交渉をするつもりもない、という条件の下で、アメリカの勝利とは何を意味していたのでしょうか。

それは明らかに、日本の植民地化、そして隷属です。もしかすると、民族浄化ということまで視野に入れていたかもしれません。それこそが、アメリカ政府の戦争目的だったのではないのでしょうか。

ルーズベルトが人種差別主義者だったという事実も、この結論を裏付けます。彼は、白人国家であるアメリカとソ連が協力して、黄色人種である日本人をやっつけよう、という空想をしていたと考えられます。その空想に基づいて、太平洋戦争は始められました。

また、歴史的にもこの見解は支持されます。太平洋戦争は、アメリカ人が植民地時代から続けてきた、西部開拓の延長として理解できます。

彼らは、インディアンを皆殺しにしながら、その居住地を奪ってきました。インディアンを平らげたあとで、次に標的にされたのが、日本だったというわけです。

3

3・1

議論を整理しましょう。

太平洋戦争におけるアメリカ側の目標は、日本の植民地化でした。しかし、戦後日本の独立によって、その目標は達成不可能となりました。

一方で、日本側の目標は、東アジアの独立と再建でした。現時点において、その目標は達成されていると言えます。

したがって、太平洋戦争の勝者は日本であり、敗者はアメリカです。

3・2

日米戦争と同時に、アメリカは、中国においても戦争を続けていました。そこでの目標は、蒋介石を支援して、中国に統一国家を建設させることでした。しかし蔣は、日中戦争では一時的な勝利を収めたものの、その後、共産党との戦いに敗れ、中国大陸を追い出されています。

つまりアメリカは、中国においても、所期の目標を達成できず、敗北していると言えます。さらにその後、ベトナムでも負けました。結

局のところ、アメリカは、アジアにおいて一度も勝利を収めていません。彼らは負け続けています。

3・3

アメリカが日本の独立を承認した時に、白色人種の有色人種に対する優位は、完全に否定されました。この点に関しては、日本の軍事力が、アメリカに代表される白人勢力を屈服させたと言えるでしょう。

日本人にとっては、あの戦争は無意味なものでした。人種間の平等という、当たり前の原則を再確認しただけだったからです。しかし欧米社会にとっては、それはかつてない大変革を意味していました。つまり、植民地体制の崩壊です。

植民地支配の消滅は、まるで自然に起きた出来事のように語られがちですが、実際には、多大なる犠牲を払った上で日本人が達成した成果です。日本がああ戦争を戦わなかったならば、欧米による植民地支配はいまだに続いていたことでしょう。それは、歴史を見れば明らかです。

しかし欧米人は、自分たちが犯した過ちを隠すために、歴史認識そのものを捻じ曲げようとしてきました。日本とアメリカ双方の戦争意図を歪め、歴史の姿そのものを変えようとしているのです。

4

4・1

最後に一つだけ、注意してほしいことがあります。アメリカの戦争目的に関するこれまでの議論は、推測に基づいている、というこ

とです。アメリカの戦争目的が日本の植民地化であった、という考えを支持する直接的な証拠は、我々に入手可能な資料の中には存在しません。その点で、我々の考察は不十分だと言えます。しかし一方で、我々の推測を否定するような証拠も、現時点では存在しません。

どういうことかというと、アメリカ政府はいまだに、太平洋戦争に関係する資料の一部を公開していないのです。ルーズベルトの手紙や日記のような私的な文書、そして政府の意思決定に関する資料など、多くの資料が「国家安全保障上の理由」から非公開のままです。

しかし、あの戦争がなぜ行われたのか、という真実の追求は、現存する全ての資料を精査した上で為されなければなりません。ゆえに、日本人は、アメリカ政府に対して、太平洋戦争に関する全ての資料の公開を要求するべきです。

日本人にはそれを知る権利があり、また、二度とあのような戦争を繰り返さないために、それを知る義務があります。我々はアメリカ政府に対して、毅然とした態度で臨まなければなりません。

4・2

しかしながら、これまでの議論が正しいとすると、アメリカ政府の態度も理解できます。

彼らが資料を公開しようとしなないのは、アメリカは負けた、という事実を隠蔽するためでしょう。我々は戦争に勝ったのだ、という嘘をつき続けるために、彼らはそれを隠そうとするのです。

アメリカはすでに、真実によって裁かれていることを知るべきです。

以上の話を欧米人に聞かせると、彼らはおそらく、自分たちはそれを知らなかったんだ、と言うでしょう。ルーズベルトにそんな意志があつたなんて知らない、あの戦争にそんな意味があつたなんて知らない、と。まるで、自分はそれを知らない、と言えば、どんなことでも許されると思っているかのようです。

この問題は、すでに新約聖書において指摘されています。ペテロという使徒はイエスから、「鶏が鳴く前に、お前は三度わたしのことを知らないと言うだろう」と予言されました。実際にイエスが捕まったあと、ペテロは誰に聞かれても「私はイエスのことなど知らない」と答え続けました。

この箇所におけるペテロの態度は、現代の欧米人にも受け継がれています。彼らは、自らの手で、自らをだまし続けています。自分は知らなかった、と言うことができるようにするために、わざと本当のことを分からなくしてしまうのです。そうやって真実を隠してしまえば、誰も責任を負わなくて済みます。最後に、我々はそれを知らなかったのだ、と言えば、無罪放免になるという理屈です。

真実を隠すということは、彼らにとつては、いいことづくめの魔法の杖のように思えます。しかしそれは、真実が暴かれるまでのことです。ひとたび真実が暴かれたならば、彼らは、膨れ上がった自分の罪と向き合わなければならなくなります。

イエスの死によって人類すべての罪が許されたというのは、後世の人々の勝手な妄想です。あらゆる罪には必ずその報いがあり、他人がそれを肩代わりすることはできません。この明白な事実を伝えていない点は、聖書の欠陥です。

ルーズベルトの罪状

1

ここでは、ルーズベルト大統領の戦争責任について、さらに詳細に追及を行います。

1・1

まず、アメリカ政府が、日米開戦以前に、日本の外務省が使用していた暗号を解読していた、ということを実事として認めます。そうすると問題は、果たしてアメリカ政府は、彼らが入手した情報から、日本軍の奇襲攻撃を予想できたのかどうか、という点にあることになります。

たとえば、真珠湾攻撃決行の一週間前には、日本外務省は駐米大使に向けて、暗号機の破壊を指示していました。また、攻撃の前日に大使館へ送信された対米最後通牒の内容も、アメリカ政府によって即座に解読され、攻撃が始まる前に大統領に報告されていました。

これだけの情報を手に入れておきながら、日本軍の奇襲を予想できなかったのだとしたら、ルーズベルトには、アメリカ軍の総司令官としての能力が欠如していた、と言わざるをえません。この点に関して、アメリカ国民は彼の戦争責任を追及しなければなりません。

さらに、攻撃を受けた後で、ルーズベルトが現地の司令官を解任したことも問題です。奇襲成功の責任はルーズベルト一人が負うべきものであり、現地の司令官に責任はありません。この件は、最高司令官であるルーズベルトが、自分の失敗の責任を部下に押し付けたものと考えられます。これは、指揮官としてあるまじき行いです。

このような恥ずべき行為を、アメリカ国民のみならず、アメリカ軍までもが不問に付しているということは、アメリカという国家そのものの信頼を傷つけるものであると言えます。

1・2

さて、ここまでは、ルーズベルトの司令官としての能力の欠如を問題にして、彼の戦争責任を追及してきました。しかし、以上の議論は不当なものだったかもしれません。というのも、ルーズベルトには軍隊の司令官としての能力が十分に備わっていた、という可能性も考えられるからです。つまり彼は、日本軍の奇襲攻撃の可能性を十分に認識していながら、あえてそれを成功させた、という見方をとることもできます。

では、この場合、ルーズベルトにはいかなる責任があったと言えるのでしょうか。それとも、何の責任もなかったのでしょうか。

はっきり言って、この場合でも、司令官としての彼の責任は全く減ぜられません。軍隊の司令官とは、指揮下にある兵隊の命を預かる存在です。彼は、彼の指揮下にあるすべての将兵の生命に対して、責任を負っています。本来ならば避けられたはずの犠牲を、あえて指揮下の将兵に負わせてしまったのだとすれば、指揮官は当然その責めを負わなければなりません。したがってルーズベルトは、奇襲攻撃の成

功が確認された時点で、少なくとも最高司令官を解任されるべきでした。

そして、大統領を解任する権限は議会にあることから、大統領の軍に対する背信行為を追及しなかった責任は、アメリカ議会にあると言えます。さらに、議会が民意を反映するものであることから、アメリカ国民全体に、戦争責任があったと言うことができます。

また、この場合でも、現地の司令官に責任を被せようとしたルーズベルトの行為は、同様に咎められるべきです。

1・3

また、もしもルーズベルトが、奇襲攻撃の可能性を予測していて、さらに、それを回避しようとしていたのだとしたら、その場合、ハワイの司令官に対して、また、太平洋上のその他の地域に展開する部隊に対して、緊急性のある指示を全く行わなかったことには説明が付きません。

彼は、奇襲攻撃の可能性を察知していなかったか、あるいは、察知した上で、自軍の損害を回避する行動をとらなかったか、どちらの場合しか考えられません。そして、どちらの場合でも、彼の最高司令官としての資質と責任が問われなければなりません。

1・4

また、次のように考えるアメリカ人がいることも、私は知っています。ルーズベルトはたしかに、わざと日本軍の攻撃を成功させた。しかしそれは、悪の帝国である日本を滅ぼすために始めた戦争であり、それゆえに、彼の背信行為は咎められるべきではない、と。

この考え方を採用する場合、真珠湾攻撃が開始される以前に、ルーズベルトは日本との開戦を決定していたことになります。それならば、なぜ彼は、その決断を国民に公表しなかったのでしょうか。それが、アメリカ国民が命がけで戦争をする十分な理由になる、と彼が判断していたのだとすれば、その考えを国民に公表し、民意を問うべきでした。しかし、彼はその考えを公にせず、戦争が始まって、後戻りができない状態になるまで、隠していたことになります。

これは、軍隊の総司令官としてではなく、国家の指導者としての大統領の、国民に対する背信行為であると言えます。そして、それを知りながら、アメリカ国民は彼を免責しようとしているのです。

2

2・1

以上を総括すれば、アメリカ合衆国大統領は、アメリカ国民から、あらゆる事柄に関して責任を免除されている、と結論できます。

戦争に関する判断は、国家にとって最も重大なものです。国家の指導者が、この問題に関して国民を欺いたとすれば、それは国民に対する最大の背信行為と言えます。

しかしアメリカでは、国家と国民に対する最も重い犯罪行為さえ、大統領の判断ならば、許されるのです。これが独裁国家でないとするれば、何なのでしょうか。

アメリカ合衆国が建国以来追い求めてきた国家の理想像は、ルーズベルトによって汚され、完全に破壊されました。現在のアメリカは、輝かしい民主国家アメリカの残骸でしかありません。そこにあるのは、自らの姿を直視する勇気を失った、単なる独裁国家です。

合衆国大統領は、アメリカにおける独裁者であり、アメリカ国民は彼の奴隷です。アメリカ人の心に、まだ少しでも自由を愛する気持ちが残っているのならば、大統領を弾劾する勇気を持つべきです。

2・2

東条英機は、真珠湾攻撃が成功した直後に、これでルーズベルトは失脚するだろう、と述べました。これは当然の予想で、普通の国家ならば、そうなっていたでしょう。しかし事実は全く逆で、ルーズベルトは国民から熱狂的に支持されました。

東条は、アメリカという国家の異常さを全く理解していませんでした。自分と対等の相手として、アメリカを眺めていたのです。アメリカは無法者の国家である、という根本的な事実を把握できていなかったことが、日本の敗因だったと思います。彼はお人好し過ぎました。現代の日本人も、彼と同じ間違いを犯していないと言い切れるでしょうか。日本は、政治的には勝利しましたが、軍事的には完敗でした。その事実を忘れるべきではありません。

3

フランクリン・ルーズベルトの実家は、アヘン商人をしていました。中国人にアヘン売って稼いだ金が、彼の政治活動を支えています。彼が中国政府を積極的に支援したのは、中国人を搾取し続けるためでした。

アメリカ人が親中派と呼ぶのは、中国でうまい汁を吸っている人のことであり、中国人のためを思っている人のことはありません。ア

メリカ人の言葉の使い方は、常に自己中心的なものであるため、彼らの言葉を解釈する場合、そのことに注意する必要があります。

さらに悪いことには、アメリカ人自身が、自分たちの言葉の偏りを意識していないように見えます。彼らが親中派と呼んでいる人々が、どうしてそう呼ばれているのかという理由と、親中派という言葉が与えるイメージとを、彼ら自身が区別できていないのです。このような、自分たちが使っている言葉に対する意識の低さが、アメリカ外交の幼稚さにつながっているように思われます。

親中派と呼ばれる人々の提言は、中国人民のためになるとは限らず、むしろ中国人の利益を損なうものである場合があります。これは、親日派と呼ばれる人々についても同様です。繰り返しますが、最も悪いことは、彼ら自身がそのことに無頓着であるということです。どんな場合でも自分の利益を最優先するということに、彼らは何のやましさも感じていません。

欧米人の言葉には誠実さが欠けています。彼らの話に耳を傾ける場合、そのことに注意する必要があります。

私がいま本当に危惧していることは、そのようなアメリカ人の言葉遣いが、日本人の間にも広がりつつあるのではないか、ということです。はつきり言っておきますが、我々は欧米人の真似をするべきではありません。墮落した人間に親しめば、自分まで墮落してしまいます。欧米の文化とは距離を置かねばなりません。

西洋文明について

1

西洋文明の特徴は、レイシズムと、道徳的無気力です。

前者は、ユダヤ教に由来すると思われます。たとえばナチズムは、ユダヤ的な選民思想の裏返しにすぎません。

後者は、キリスト教から受け継がれたものです。キリスト教は道徳の問題を、完全に個人の内面に閉じ込めてしまいました。その人の心が清らかであれば、彼はよい人間なのであって、それを行動によって表現する必要はありません。道徳とは、個人の心の中だけにあるものであり、現実の世界とは関係を持たないのです。

キリスト教に由来するこのような考え方が、現在のヨーロッパに広く行き渡っている、道徳的怠惰の原因であると考えられます。彼らにとっては、よい人間であるために、道徳的な振る舞いをする必要はないのです。

2

肯定的な面に目を向けましょう。自然科学の発達は、西洋文明によって成し遂げられた偉大な成果の一つです。自然科学は因果律を重

んじ、現実を見つめることを我々に促します。それはキリスト教とは逆に、我々の視線を外へと向けさせるのです。

しかし同時に、自然科学の成果を矮小化しようとする試みも、西洋文明の内部において、しばしば現われています。たとえばある人々は、ニュートンの運動法則は単なる仮説にすぎず、普遍性を持ちえない、と主張しています。しかし、ニュートンの法則に反するいかなる現象も自然の中に見出すことはできませんし、それに反する現象を想像することすら、我々にはできません。

科学的法則の絶対性を否定するこれらの人々は、あたかも、人間の恣意的な考えによって、自然を変えることができると信じているかのようです。実際には、個人の考えは、現実とは無関係であるにもかかわらず、ニュートンの法則に普遍性はない、と考える人がいたとしても、依然として、あらゆる事象はその法則どおりに運行しているのです。彼らは現実を受け入れることを拒絶し、自分の心の中に閉じこもろうとしています。

自然科学はいまだに、様々なドグマによって歪められ、貶められています。このような傾向は、西洋文明そのものに内在するものであると考えねばなりません。それは明らかに、知性の退化へ向かっています。

誤解されることが多いのですが、ドイツを代表する哲学者カントの思想は、このような傾向への抵抗として理解することができます。彼は、因果律の絶対性を認めていました。これは、ヨーロッパの一般的な思想家には見られない、際立った特徴です。しかし彼の努力も、西洋文明を変えることはできませんでした。言うまでもありませんが、このような知的退廃の原因も、キリスト教に求めることができます。カントも結局は、キリスト教の引力圏から逃れられなかったのです。

キリスト教は、人々に内面的な自由を保証します。しかしそれは、何の犠牲もなしに達成できるものではありません。

それは、人々に無知を強います。ひとたび無知に陥った人々は、もはや、自分の無知を知ることすらできなくなります。それはまるで、地獄の衆生が、自らが地獄にいることを認識できないのと同様です。

3

西洋人の唱える自由や人権、民主主義といった美しい言葉の数々は、彼らが今までに行ってきた侵略行為を隠すための、いつわりにすぎません。彼らが考える進歩的な国家とは、正当な理由もなく他国に爆弾を落とし、それが原因となって生じた難民を海に突き落とし、見殺しにするような国家です。

日本では、そのような振る舞いをする者を、ならず者、あるいは鬼畜と呼びます。

付論1 運動法則の必然性について

ニュートンの運動法則の必然性について、考えてみましょう。運動の第三法則は、作用と等しい大きさの反作用が存在する、という法則です。

もしも、作用に対して反作用が存在しなかったとしたら、様々な不合理が帰結します。たとえば、船に乗って、オールで水を漕ぐときに、オールが水をすり抜けてしまうことになるでしょう。そして、船は少しも前に進まない、ということになります。なぜなら、船が前に進むのは、オールが水を押すのと同じだけの力が、オールに作用するからです。水からオールに加えられる反作用が、船の推進力になっています。

運動法則とは、オールを漕げば船が進む、という事実を、別の言葉で表現しただけのものです。我々には、それを否定する権利はありません。

たとえば、あなたが乗っていた客船が沈没してしまい、あなたは救命ボートで逃げ出したとしましょう。遠くに陸地が見え、しかもボートの中にはオールが備え付けられているのに、それでもあなたは船を漕がなかったとしましょう。なぜかと言えば、作用反作用の法則が信じられないからなのです。

このような人間だけに、運動法則を否定する権利があります。しかし彼は、同じ理由から、歩くこともできず、食事を摂ることもできないので、すでに生きてはいないはずです。

科学法則の必然性は、このように理解されるべきです。それを否定することは、単に不合理なのです。

付論2 運動法則と因果律

運動法則と因果律の関係を明らかにするためには、詳しい考察が必要になると思います。

因果律が意味することは、原因と結果の間に一対一の対応が存在する、ということです。つまり、他の条件が同じならば、同じ原因から同じ結果が生じるということです。

よって、同一の原因から二つ以上の異なる結果が可能である場合、因果律は破れていると言えます。おそらく、因果律のこの性質から、運動法則を導くことができると思われます。

たとえば、作用と反作用の大きさが不等である場合、どちらが作用で、どちらが反作用であるか、という恣意的な選択によって、結果が二通りに分かれるでしょう。この場合、因果律は破れていると言えます。ゆえに、因果律が成り立っているならば、作用は反作用に等しくなければなりません。

因果律は、運動法則の十分条件になっているはずですが。興味のある方は、証明を考えてみてください。

この世界には、複雑なものなど何一つありません。あらゆる出来事の裏には、一種の単純性が潜んでいます。仏教ではそれを、一因一果の因果律と呼んでいます。

第III部

未来について

中道

1

仏教の基本的な考え方は、中道という言葉で表現されます。中道とはなんでしょう。

1・1

具体的に考えるために、死後の世界を例にとってみましょう。死後の世界は存在するのか、しないのか。誰もが一度は、こういう問題を考えてみたことがあるのではないかと思います。

ここに、死後の世界は存在しない、と考える人がいたとします。彼は、一体どのような根拠に基づいて、自分の主張を正当化するのでしょうか。

1・2

次のように考えてみましょう。

いまでも我々は、月の裏側がどうなっているかを知っています。一九五九年、ソ連のルナ三号という衛星が、月の裏側の写真を撮ることに世界で初めて成功しました。それ以来多くの調査が行われてきた

ので、そこがどのような場所なのか、我々はよく知っています。しかし百年前には、人類の誰も月の裏側を見たことはありませんでした。そこで、百年前に、次のように考えた人がいたとします。「月の裏側を見たことがある人は、一人もいない。ゆえに、月の裏側は存在しない」

さて、この考えは正しいでしょうか、間違っているでしょうか。

明らかに間違っています。

あるものを見た人がいない、という前提から、それが存在しない、という結論を引き出すことはできません。そのような推論は、確実に間違っています。

1・3

死後の世界に話を戻しましょう。

私を知る限り、死後の世界は存在しない、と主張する人々の推論はまさに、「月の裏側は存在しない」と考えた人の推論と、まったく同じです。

彼らの主張を簡単に表現すれば、次のようになるでしょう。

「死後の世界を経験した人は、一人もいない。ゆえに、死後の世界は存在しない」

よって、彼らの推論は、先ほどの推論と同じく誤りです。

1・4

では、正しい推論とはどのようなものでしょうか。

それは、次のようになるでしょう。

「死後の世界を経験した人はいない。ゆえに、死後の世界は存在するとも言えないし、存在しないとも言えない」

これが、唯一の正しい推論です。これ以外の答えは、我々が知りうる知識からは導くことができません。それが存在するという考えも誤りであり、同様に、存在しないという考えも誤りです。

これが中道です。何かがある、ということにも、ない、ということにもこだわらない、ということです。分からないことは、分からない、と、ありのままに認識すること。それが正しい知恵です。

2

しかし、ここで、次のような疑問を抱く人がいるでしょう。今までの議論が正しいとすると、なぜ仏陀は地獄の話をされたのだろうか、と。

この疑問は正当なものです。たしかに仏陀は様々なお経の中で、地獄や天国、つまり死後の世界についてお話をされています。これは、どのように考えればよいのでしょうか。

2・1

この問題を考えるにあたって、中阿含經に収められている、一つのお経が参考になります。そこで仏陀は、死後の世界に疑問を抱く信者に対して、ユニークな回答を与えています。

彼はまず、全体を二つの場合に分けます。死後の世界が存在する場合と、存在しない場合です。

これは世界の状態に関わることであり、個人の意思とは無関係な場合分けです。あなたがどう思おうが、死後の世界はあるならあるし、ないならない、とあらかじめ決まっています。あなたの意思によってそれを変えることはできません。

次に、二つの場合のそれぞれを、さらに二つの場合に分けます。あなたが死後の世界を信じる場合と、信じない場合です。この二つの選択肢は、あなたの意思によって変えることができます。

以上によって、二掛ける二で、合計四つの場合分けをしたことになります。

一、死後の世界が存在し、あなたがそれを信じている場合

二、死後の世界が存在せず、あなたがそれを信じている場合

三、死後の世界が存在し、あなたがそれを信じていない場合

四、死後の世界が存在せず、あなたがそれを信じていない場合

この四つで、すべての場合が尽くされています。これらについて、ひとつずつその中身を検討してゆきます。

一つ目の場合

この場合、あなたは死後の世界を信じているので、天国に行くために善い行いを心掛けるでしょう。それは実際に存在するので、死後は天国へ行けます。

二つ目の場合

この場合、あなたは死後の世界を信じているので、天国に行くために善い行いを心掛けます。そのため、世間においてあなたの評判は高くなり、人徳のある立派な人間として、満足した人生を送ることができます。

三つ目の場合

この場合、あなたは死後の世界を信じていないので、とくに善い行いを心掛けることはしないでしよう。

そうすると自然に、善を行うことは少なくなります。あなたは体面を保つために、人前では行儀良く振舞うでしょう。しかし人に見られていないところでは、気が緩み、小さな悪を積んでゆくことになります。人間の心は、善を行うことを怠れば、必ず悪を為すようになります。

したがって、あなたは結局、地獄に落ちることになるでしょう。

四つ目の場合

この場合、あなたは死後の世界を信じていないので、とくに善い行いを心掛けることはしないでしよう。よって、あなたの心は次第に悪に傾いてゆきます。そのため、あなたに対する世間の評判は悪くなり、人に軽蔑されながら、苦しい人生を送ることになります。

2・2

さて、以上の考察を表にまとめてみましょう（表一）。

ここから分かることは、死後の世界が存在するならば、当然それを信じたほうがよいし、たとえ死後の世界が存在しなくとも、それを信じていれば良い結果が得られる、ということです。

逆に、死後の世界を信じていない人は、それが存在する場合も、しない場合も、共に不幸な結果を得る、と言えます。

以上のことから、死後の世界の有無にかかわらず、それを信じるべきだ、と結論できます。

これが、死後の世界に関する仏陀の意見の一つです。それを信じることは無条件によいことだから、信じるべきだ、という考え方です。

2・3

ここで、信仰と行動の関係についてさらに考察してみましょう。

まず、死後の世界を信じていない人の、心の動きに注目してみます。この人は、それは存在しない、と信じきっています。彼が考えを変えて、それを信じるようになる、ということはありうるでしょうか。

表一 死後の世界

	信じる	信じない
存在する	○	×
存在しない	○	×

もしも、彼がそれを信じるようになったならば、自分の生き方を変える必要が生じます。彼はこれまで善を為すことを意識せずに生きてきましたが、これからは善を為す努力をしなければなりません。それは、彼にとつて大きな負担になるでしょう。さらに彼は、そのことによつて、今までの自分の人生を否定しなければなりません。このことも、彼に大きな苦痛を与えるでしょう。

つまり、死後の世界が存在しない、という考えをひとたび受け入れてしまったならば、その考えを変えることはとても難しくなる、ということです。

もしも、死後の世界が存在し、そこで人生の結果に直面しなければならぬのだとすれば、彼は、自分がろくでもない人間であつたという現実を突き付けられることになります。そのことは、彼の心をひどく傷つけるでしょう。しかし、もしもそれが存在しないのだとすれば、そのような事態は避けられます。彼は、自分自身の現実の姿を見ずに済むようになります。したがつて、それは存在しないほうがよいのです。

つまり、彼の自尊心を守るためには、死後の世界は存在してはいけない、ということなのです。こうなると彼にはもはや、それが存在する、という可能性すら考えることができなくなつてしまいます。彼の心がそれを拒絶してしまうのです。このようにして彼は、我々と同じ前提から出発して、死後の世界は存在しない、という誤つた結論を導くこととなります。

一方で、死後の世界を信じている人間は、自分自身の状態を肯定しています。死後には良い結果が得られるだろうし、たとえそれが存在しなくとも、彼の人生には何の負い目もありません。

彼の方がむしろ、それが存在しない、という可能性を受け入れる

ことができます。したがつて彼は、正しい判断を下すことができるでしょう。

2・4

いったい、彼我の違いはどこにあるのでしょうか。

それは、現実に善い行いをしているかどうか、という点にあります。死後の世界を信じる人間は、善を積みみます。それによつて彼は、偏見を持たずに、正しい判断を下すことができるようになります。逆に、善を積むのを怠るならば、彼の判断力は偏見に歪められ、知恵は曇ります。

悪を避け、善を為すこと。それが中道です。中道を歩むならば、心が清らかになります。心が清らかになれば、正しい知恵が芽生えます。つまり、善を積むことで知恵が生じるのです。もしもこの道を踏み外すならば、あなたの心は無知の暗闇に落ち込んでしまうでしょう。結局のところ、仏教の本質は次の偈に尽くされています。

諸悪莫作 衆善奉行

自淨其意 是諸仏教

(悪をなすことなく、善を行い、

自らの心を浄めること、これが諸仏の教えである)

3

ここまで考察してきたのは、死後の世界は存在しない、という主張についてでした。しかし世の中には、これとは正反對の主張を行う人々があります。次に、彼らについて考えてみましょう。

3・1

具体例として、キリスト教徒を取り上げましょう。彼らは、来世が存在し、また、神が存在する、と考えています。彼らの主張を検討してみましよう。

驚くべきことに、キリスト教徒の中にも、仏陀とまったく同じ方法で考察を行った人物がいました。フランスの数学者パスカルは、神の存在と信仰について、場合分けによる分析を行いました。

彼はまず、全体を二つの場合に分けます。神が存在する場合と、存在しない場合です。次に、それぞれの場合を、神を信じる場合と、信じていない場合の二通りに分けます。よって、合計で四つの場合があることとなります。これらすべての場合について、彼はひとつずつ考察を行いました。

キリスト教の信仰によれば、もしも神が存在するならば、神を信じるものは天国へ行き、神を信じていないものは地獄に落ちます。

一方で、もしも神が存在しないならば、神を信じていても、いなくても、違いは生じません。

結果をまとめると、表二のようになります。

ここからパスカルは、神が存在する可能性が少しでもあるならば、神を信じたほうがよい、という結論を引き出しました。控えめに言っ

表二 キリスト教の神

	信じる	信じてない
存在する	○	×
存在しない	—	—

ても、これは曖昧な答えです。

さて、この表をよく見ると、先ほどの表一と似ていることに気が付きます。しかし、二列目の結果が異なっています。この違いはどこから来たのでしょうか。

3・2

違いは、天国へ行くための条件にあります。

仏教では、善を行うものは天国へ行く、とされていました。一方でキリスト教では、神を信じるものは天国へ行く、とされています。ここに、仏教とキリスト教の決定的な違いがあります。

キリスト教によれば、ある人が悪人であっても、神を信じるならば天国へ行くことができます。また、その人が善人であっても、神を信じていないならば地獄に落ちます。極端なことを言えば、どれほど悪いことをした人であっても、神様さえ信じていれば天国へ行けるのです。そうであるならば、神を信じる者にとって、善を行うことは何ら重要なことはありません。したがって彼は、善を行おうという積極的な意志を持つことができます。それゆえ彼の心は少しずつ、悪へ傾いてゆくことになります。

善を行うということは、苦勞の多いことです。したがって、しっかりとした意志を持っていなければ、善を積むことはできません。そのような意志が欠けている場合、その人は簡単に悪に染まります。

彼は、他者からの非難を恐れるために、人前では行儀良くふるまうでしょう。しかし、人に気付かれる心配がない場合は、善を行う必要はありません。彼にとっては、善を行うよりも、悪を為すほうが容易なのです。こうして、彼の心は少しずつ汚れてゆくでしょう。

それでも、彼には何の不都合もありません。なぜなら、死後には神様から認めてもらうことができ、天国へ行くことができるからです。つまり、もしも神が存在するならば、それだけで彼は立派な人間になります。

しかし、もしも神が存在しなかったとしたら、彼はただのくずです。そのため彼の心は、自分の自尊心を守るために、神が存在しないかもしれない、という可能性を考えることすら拒絶するようになります。そうして彼は、我々と同じ前提から出発して、神は存在する、あるいは、死後の世界は存在する、という誤った結論を導くようになります。このようにして、彼の判断力は歪められます。

3・3

こうした誤った判断の原因は、どこにあるのでしょうか。

それはひとえに、諸悪莫作しよあくまくさを実践しないことにあります。善を積むことを怠ったために、彼の心は汚れ、偏見の網にとらわれます。そのため、正しい判断を下せなくなってしまいます。

善を行うことは、正しい知恵を獲得するための唯一の道です。

4

4・1

また、ここで行った考察は、善悪の具体的な内容によらない、ということに注意してください。

仏陀は、何が善であり、何が悪であるか、ということを厳密に定義されなかった、と私は考えます。仏教はある意味で、善悪に関して開かれていきます。

4・2

また、以上の考察は、いわゆる依存症にも当てはまるのではないかと思います。依存症を引き起こす薬物には、それを服用した人の判断力を歪める作用があるのではないのでしょうか。

個人的な経験から言うと、アルコールを普段から服用する人は、そうでない人と比べて、アルコールの価値を異常に高く評価しているように思われます。飲酒には様々な欠点があるにもかかわらず、彼らはその欠点を無視しているように見えます。

依存性のある薬物には、その薬物の欠点を見えにくくするはたらきがあります。それは、人間の認知機能に作用していると考えられます。薬物依存症である、ということと、薬物依存症になりつつある、ということの間には、何の違いもありません。

コーランについて

1

コーランに書かれていることから解釈する限りでは、神はこの世界の外に存在していることになります。おそらく、神学者の意見もこれと同じでしょう。他方で、ムハンマドは、この世界の中に存在していました。

では、この世界の中にいる者が、この世界の外にいる者と、話をすることは可能でしょうか。もしもそれが可能だとすれば、後者は、この世界の外ではなく、中にいることになります。なぜならば、この世界の外にいうことは、この世界の中にいる者と接触できない、ということの意味しているからです。あるものが、この世界の中にあるものと繋がりを持つならば、そのもの自体、この世界の中にあると言うことができます。

ゆえに、もしも、神がこの世界の外にいたとすれば、この世界の中にいるムハンマドには、神の言葉を聞けたはずがありません。つまり、もしも、コーランに書いてあることが真実であり、神はこの世界の外にいたのだとすれば、コーランという書物は存在するはずがありません。しかるに、現にコーランは存在します。ゆえに、コーランに書いてあることは嘘です。ムハンマドは嘘をついたのです。

しかしその嘘は、人々を正しい道へと導くためのものでした。イス

2

ラムの信仰は、究極的には間違いです。ですが、社会的な実践としてのイスラムには、非常に大きな価値があります。イスラムは社会に秩序を作り、福祉を充実させ、人々の生活を向上させました。ムハンマドは確かに嘘をつきましたが、彼の知恵は本物であったと言えるでしょう。

イスラム教にも、たしかに自己中心的なところがあります。イスラムだけが正しく、それ以外は全て間違いだ、と言わなければなりません。それはそれで問題ですが、客観的に見れば、現代における主要な問題は、欧米のキリスト教徒の側にあると言えます。

キリスト教とイスラム教は兄弟のようなもので、どちらも二元論的な態度をとっています。イスラム教では、世界はイスラムの領土と、それ以外の土地に二分される、と考えます。キリスト教の場合は、キリスト教圏とそれ以外に二分される、と考えています。どちらも幼稚な考えです。

我々は共存を目指すべきであり、そのためには、何が正しく、何が間違っているかを明らかにする必要があります。私に言わせれば、キリスト教もイスラム教もどちらも間違いです。そのような間違った信仰を全て捨てることができれば、それが最もよいと思います。

真理の追究こそが平和をもたらします。そして、真理を知るためには、道理のある言葉には耳を傾けねばなりません。